

# 大航海時代Ⅲ<sup>®</sup>

コスタ・デル・ソル  
Costa del Sol



---

## 博物図説

---



# 【博物図説】



I 謎の秘宝

II 謎の生物

III 謎の遺跡



# Tapabocas

## ツタンカーメンのマスク

純金製の仮面。かつての王族の墓のひとつに、<sup>ふくそうひん</sup>副葬品として埋められている。死者の頭に直接かぶせられた状態のままで、すでにマスクの下はミイラ化しているという。

仮面の額には、<sup>はげわし</sup>禿鷲と<sup>ほどこ</sup>コブラの像が施されている。これらは権力や高い地位を象徴するのだろう。目の縁は赤く塗られ、両耳には耳飾り用の孔が<sup>あな</sup>あけられている。顎の下にあるのはつけ<sup>ひげ</sup>髭らしい。いずれも当時の流行を<sup>ほうふつ</sup>彷彿とさせる。そのほかの部分も豪華な装飾品によって鮮やかに飾られている。両目には水晶と<sup>こくようせき</sup>黒曜石が、胸部の飾りにはラピスラズリ、黒曜石などがはめ込まれ、頭部の頭巾にはガラス質の素材で<sup>しまもよう</sup>縞模様が施されている。



## Piedra de Rosetta ロゼッタストーン

古代の文字が刻まれた石碑。平らな<sup>せき ひ</sup>盤面は、細かな文字で埋められている。この文字群は、大別すると3層に分けられ、それぞれ別種の文字が刻まれている。

上段は、鳥や蛇、人体の一部を象った古代の文字で書かれている。中段は、上段のものより崩れた書体で書かれているところから、上段の文を民間の文字にしたものと思われる。下段は、ギリシアの文字である。いずれも、同一内容の文であることは、ほぼ間違いない。

もし、この石碑の文字の写しを入手することができれば、下段の文字を手がかりにして、上段の古代文字を解読することも不可能ではないだろう。

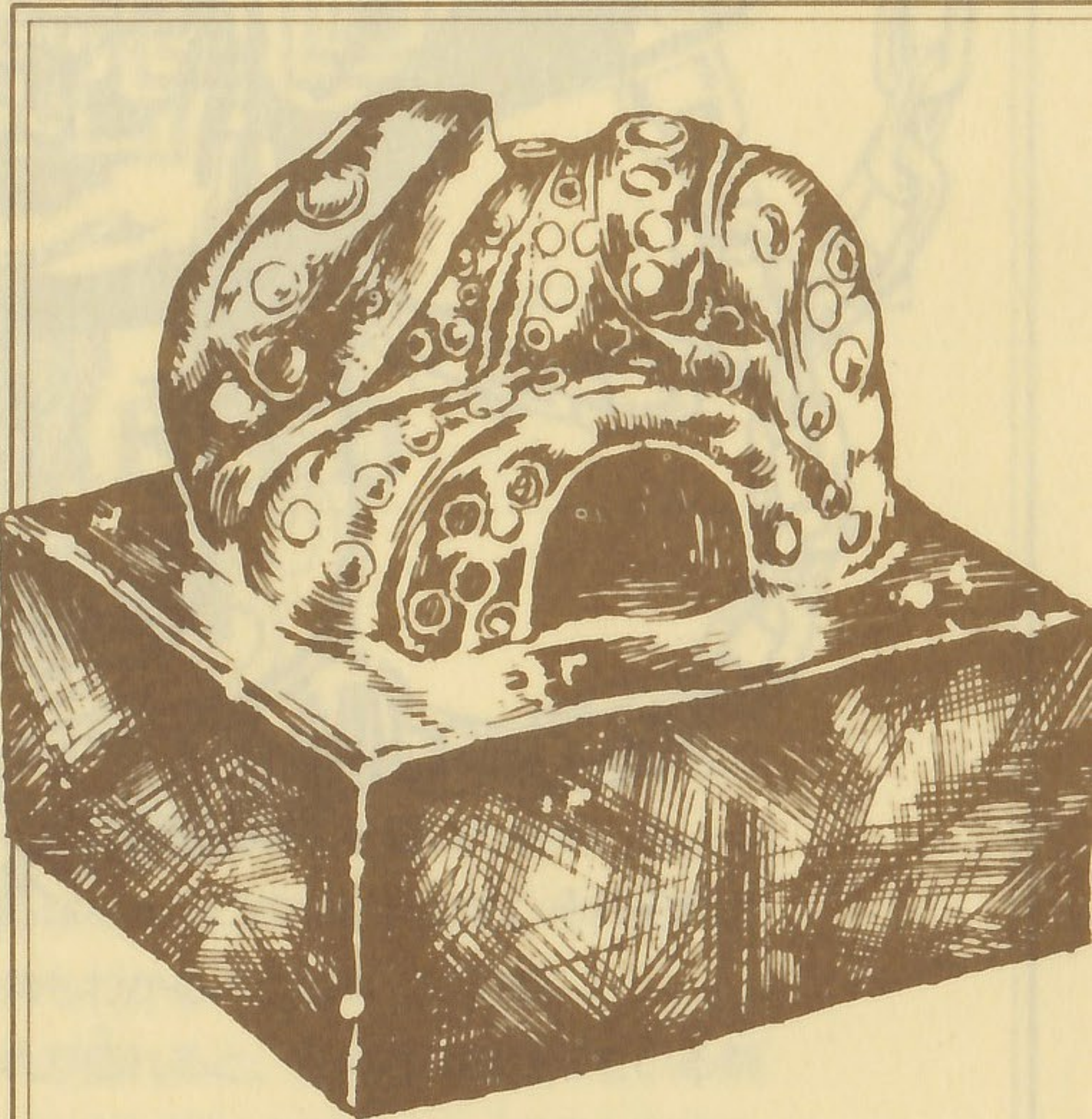
## Sello de Oro 邪馬台国の印

純金製の印綬。<sup>いんじゆ</sup>紀元後の数世紀の間に、東方の大国・<sup>かん</sup>漢の帝王から、極東の島国・<sup>わ</sup>倭の国王に対して贈られた品物であるという。

倭は、黄金の国と言われる「ジパング」のことである。ジパングと大陸の間では、昔から文化的・経済的な交流が行われており、様々な<sup>ぶんぶつ</sup>文物が海を渡った。

この印綬もそうしたもののひとつであり、漢の帝王に<sup>ちょうこう</sup>朝貢（貢物を贈る）した使者に対して与えられたのが、この印綬であった。

これらの国においては、印は特別な意味合いを持つ。印を所有することが権力者の象徴であるとともに、それを使用することは所有者の承認の証<sup>あかし</sup>とされた。



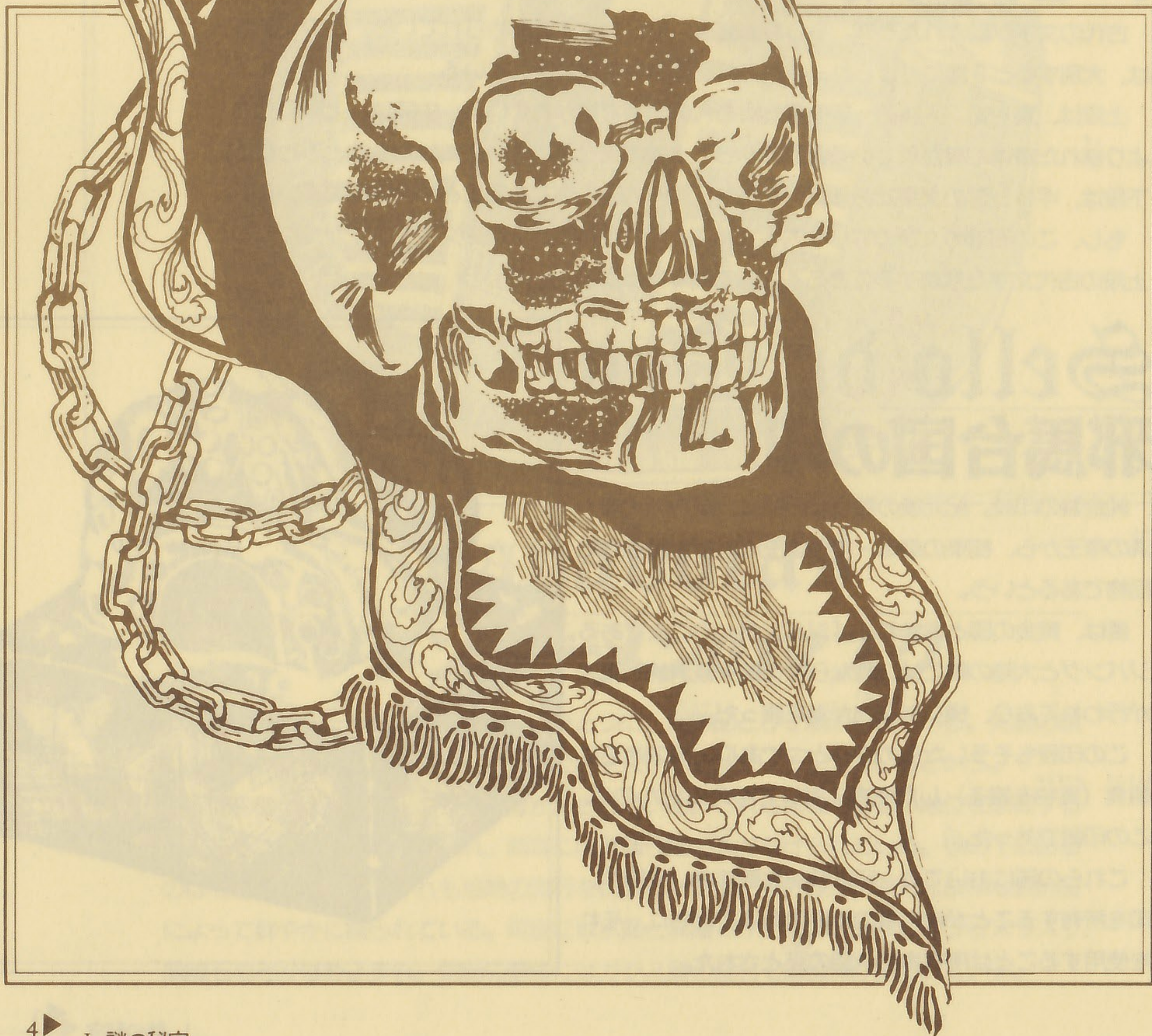
# Cráneo de Cristal

## 水晶のドクロ

水晶（クリスタル）でできたドクロ。マヤ人が宗教儀式に使用したものらしい。邪神に捧げる生け贄の魂を鎮めるのが目的だったと思われる。

頭骸骨の全体が一塊の水晶からできている。しかも、下顎の部分は取り外しが可能である。その形状は精緻を極めており、本物の頭骸骨と比べて寸分の違いもない。

果たして、いかなる加工技術を駆使したら、水晶のように硬い鉱物をこれほど精巧な形に仕上げられるのだろうか。マヤの文化からは、とても考えられない技術である。いずれかの高度な文明の遺産がマヤ人に継承された、としか考えられない。





# Sismómetro

## 候風地動儀

地震計。2世紀頃、東方の大国・漢の科学者によって作られた。大きな瓶<sup>かめ</sup>のようなものの上部には、口に球をくわえた竜の像が取り付けられ、下部には口を開いた蛙<sup>かえる</sup>がいる。

地震を感知すると、上部の竜が口にくわえている球を蛙の口の中に落とす。それぞれが8方向を向いており、球の落ちた方向で震源の方角もわかるようになっている。

この瓶の中には錘<sup>おもり</sup>が吊<sup>つ</sup>るされていて、地震でそれが揺<sup>ゆ</sup>れると、それとつながっている側の竜の口が開き、球が落ちるといふ仕掛けである。この仕掛けの精巧さは、高度な科学の存在を示すとともに、その装飾性においても文化の高さをうかがわせる。



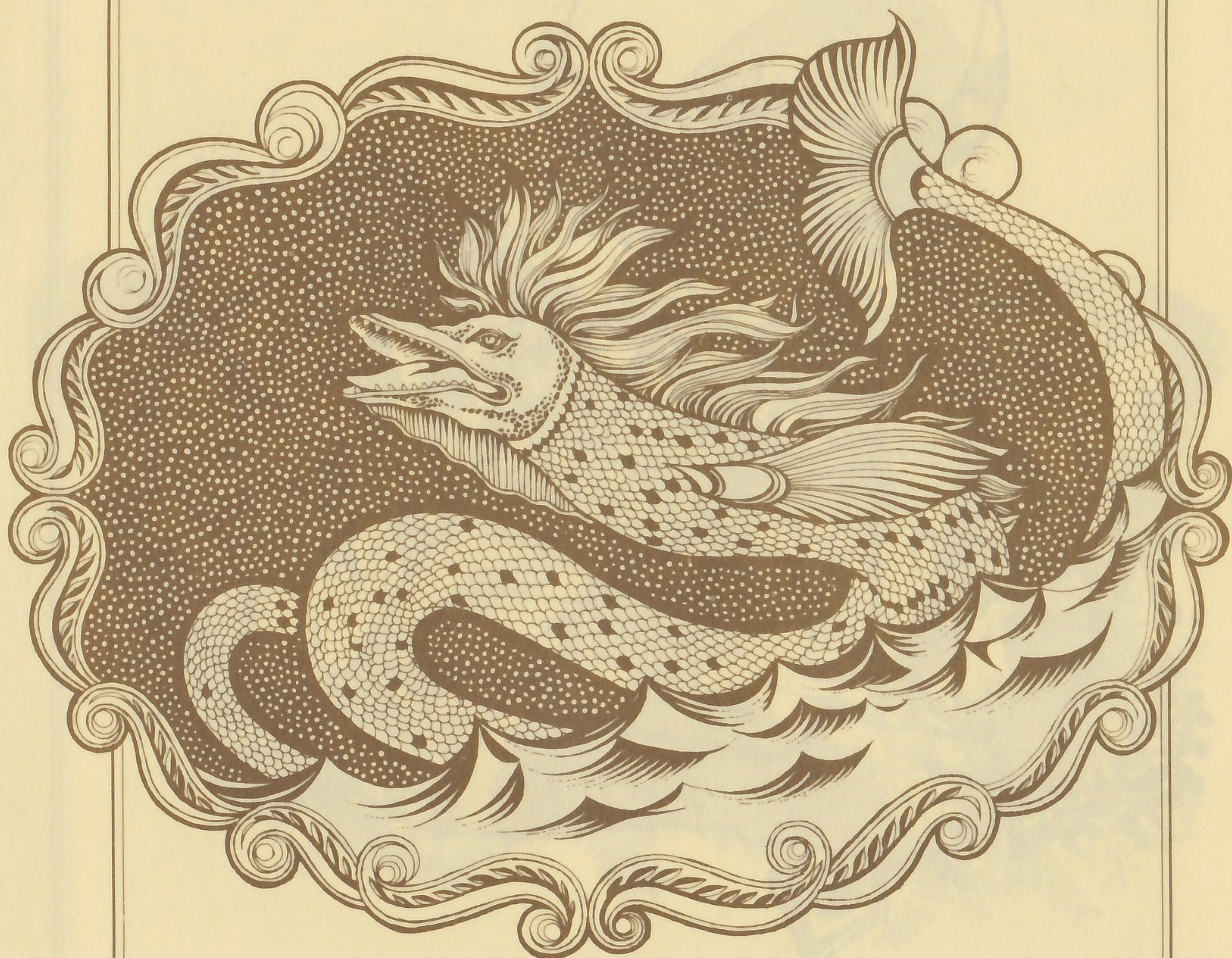
# Sirena

## 人魚

上半身が人、下半身が魚の姿をしている。夜に波間の岩場で髪をとかしながら、とても魅力的な声で歌を唄う。その声を聞いた者は、思わず海中へと誘われてしまうらしい。

人魚が現れるのは嵐の前兆<sup>ぜんちょう</sup>だとする説と、航海の安全を保証する吉兆<sup>きつちょう</sup>だとする説がある。また、別の俗説<sup>ぞくせつ</sup>では、人魚の肉を食らうと不死の体になれるが、その効力の強さに耐えられないものは変質して死んでしまうという。いずれにせよ、真偽<sup>しんぎ</sup>のほどは定かではない。

同じ海に生きるものとして、人魚に親しみを持つ船乗りも少なくない。人魚の中にも、人間と恋に墜ちて、そのまま陸の上で一生を送る者がいたという話である。



# Serpiente de Mar

## シーサーpent

水棲の大蛇。竜であるとする説もある。大海に生息しており、その体長は10メートルというものから100メートルというものまで、報告によってまちまちである。

ある目撃例によれば、海中から突然現れたシーサーpentが、遊泳中の鯨にその長い体を巻き付けて、海中へと引きずり込んでいってしまったらしい。

遠洋への航海が行われるようになってからというもの、シーサーpentの目撃例は多数報告されている。幸いに、シーサーpentによる被害は今のところ報告されていないが、被害にあったとしても、それを報告するのはまず無理であろう。



# Minotauro

## ミノタウロス

半人半牛の怪物。体を見れば人と同じだが、頭部は牛という異様な姿をしている。その性格は凶暴で、頑強な体を持ち、斧や頭の角を武器とした。

ミノタウロスについての記述は、ギリシア神話に見られる。クレタ島にミノスという王がいた頃の話だ。ミノス王の妃・パシパエが、女神の仕業によって雄牛を愛し、子を成す。そして生まれたのが、ミノタウロス（＝ミノスの牛）である。

ミノタウロスは、ラビュリントス（迷宮）に住み、生け贄の子供や罪人を襲って食べていた。しかし、アテナイの青年・テーセウスの手によって、寝ているところを殺される。



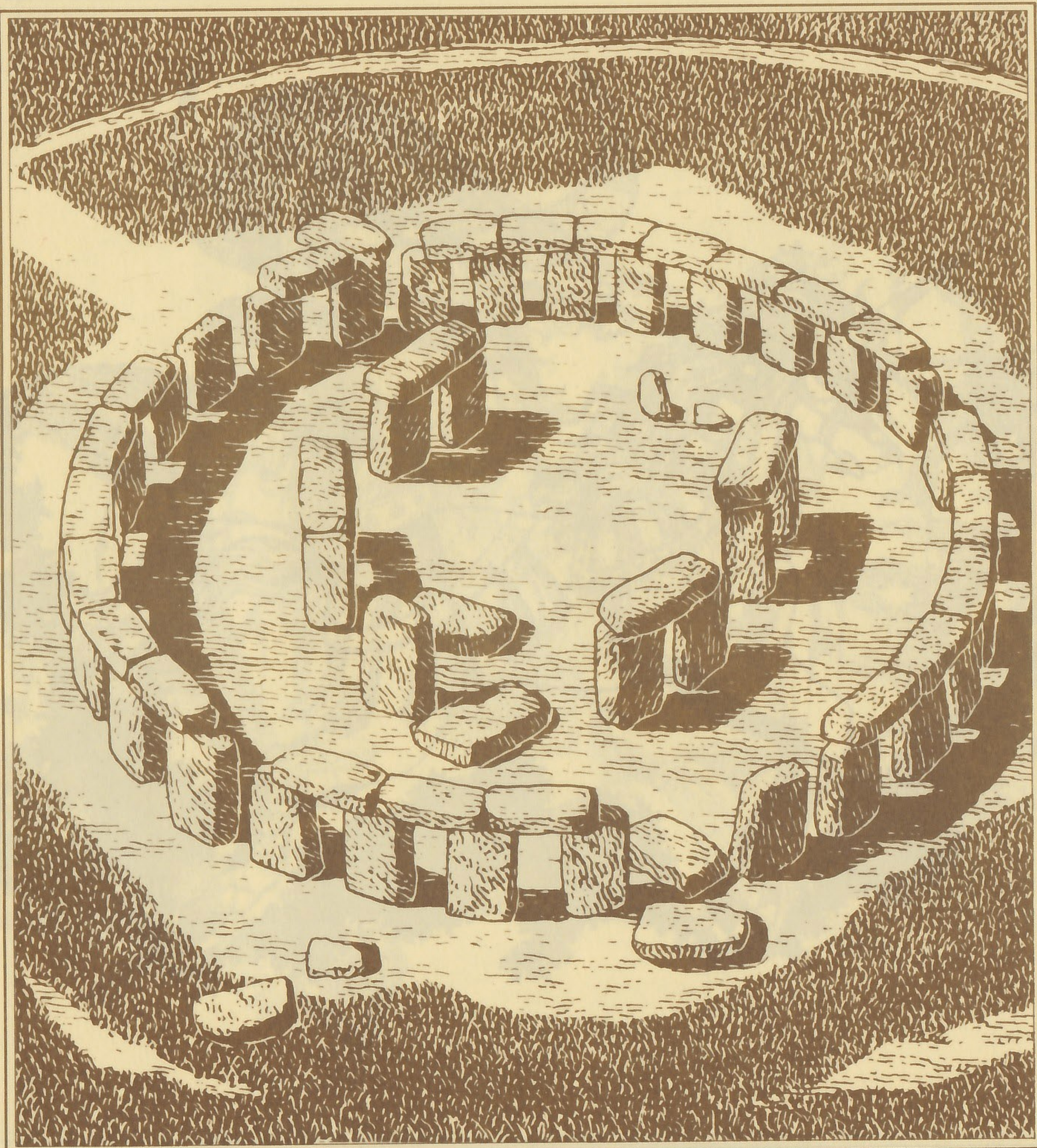
# Unicornio

## ユニコーン

馬に似た姿形をしているが、額からは30〜50センチほどの長さの角が1本<sup>は</sup>生えている。その角には不思議な力が秘められ、あらゆる<sup>じゃあく</sup>邪悪を打ち払うとも、いかなる病であろうと癒<sup>いや</sup>してしまうとも言われている。

とても頭がよく、警戒心が強い<sup>ため</sup>、捕らえることは非常に困難である。しかし、伝説によれば、汚れを知らない乙女にだけは心を許すということである。

似た生物の発見例は報告されているが、その存在は確認されていない。報告によれば、角が2本だったり、体が<sup>よろい</sup>鎧のような皮膚で覆<sup>おそ</sup>われているなど、未だその実体は謎である。



# Piedra circular

## ストーンヘンジ

環状に並べられた巨石群。中心は、二重の環になっている。外側には横石を載せた立石が並び、内側には3本1組の立石（2本の立石の上に1本の横石）が馬蹄形に並んでいる。

石器時代に造られたものらしい。古代の祭壇であるとも、天文観測所であるとも言われているが、その用途は建造方法とともに謎である。ただし、石の並び方には法則性があり、それが太陽・月の運行と関連があることから、この頃すでにある程度の天文学が発達していたと推測される。似たような巨石群は各地で発見されているが、果たしてこれらは共通の文明の手によるものなのだろうか。



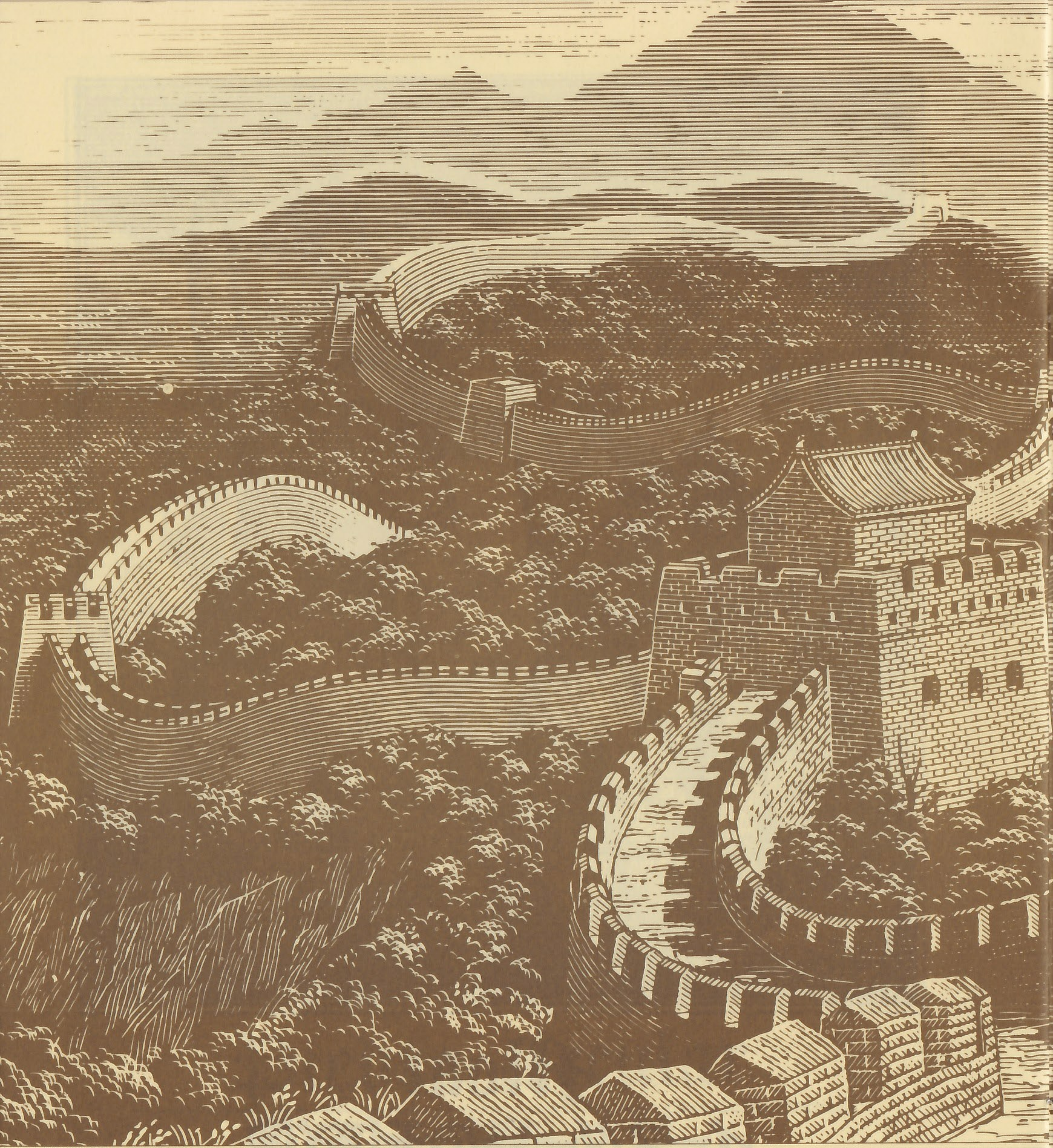
# Moai

## イースター島のモアイ像

ある絶海の孤島で発見された立像群。巨大な石から造られた人面の像で、面長な顔に長い耳を持ち、像によっては帽子のようなものを頭に載せている。いずれも無表情な面もちで、海もしくは島に向かって立っている。

これらの像がいかなる目的で造られたのか明らかではない。宗教的な理由によるものか、あるいは、島の支配者が権威を誇示するために作らせたものなのか。

島の名前は、土地の言葉で「テ・ピト・オ・テ・ヘヌア」というらしい。「地球のヘソ」という意味である。周りを海に囲まれ、孤立したこの島にはふさわしい名前かも知れない。



# Castillo

---

## 万里の長城



世界で最も長大な城。東方の大国・秦の始皇帝によって築かれた。その長さは、およそ2000キロ以上におよぶという。その城壁は、今もなお改修・増築が行われ、以前からある城壁を包含しながら伸び続けているという噂である。

なぜ、このような長い城を築かなければならなかったのか。一説によれば、農耕民族が騎馬民族の侵入から自分たちの領土を守るために築いた、ということらしい。

あるいは、ときの権力者が自分の力を万民に知らしめるために築いた、とする説もある。こうした理由で大規模な土木事業が行われるのは、いつの時代も同じようである。



# Pyramide, Esfinge

## ピラミッド, スフィンクス



世界の7不思議の1つでもある、巨大な石の建造物群。

ピラミッドと呼ばれるのは、四角錐状に<sup>しかくすい</sup>巨石を積み上げた建造物である。その大きさはさまざまで、大きなものは100メートル以上の高さを誇る。中は迷宮になっていて、古代の王家の墓<sup>はか</sup>が隠されている。そこにはミイラとともに秘宝が眠っているとの噂である。

一方スフィンクスと呼ばれるのは、人間の顔と獅子<sup>しし</sup>の胴を持った巨像である。その高さは約20メートルにもおよび、周囲を<sup>いあつ</sup>威圧するかのように真っ直ぐと前方を見据えている。一説によれば、王家の墓もしくは財宝を守るための番人であるということである。



### ▶ 参考文献 ◀

以下の文献を参考にさせていただきました。

- 『古代世界への旅』(教育社)
- 『巨大遺跡に行く』読売新聞社編(読売新聞社)
- 『幻想世界の住人たち』健部伸明と怪兵隊著(新紀元社)
- 『世界幻獣図鑑』歴史読本スペシャル49(新人物往来社)
- 『世界大博物図鑑』荒俣宏編著(平凡社)
- 『世界超古代文明の謎』(日本文芸社)
- 『古代文明と遺跡の謎』(自由国民社)
- 『世界の遺跡100』(朝日新聞社)
- 『総合新世界史図説』(帝国書院)
- 『新詳世界史図説』(浜島書店)

デザイン

水谷均 (HOBOSBROS.)

イラスト

寺島裕子 (P.2~P.9, P.16)

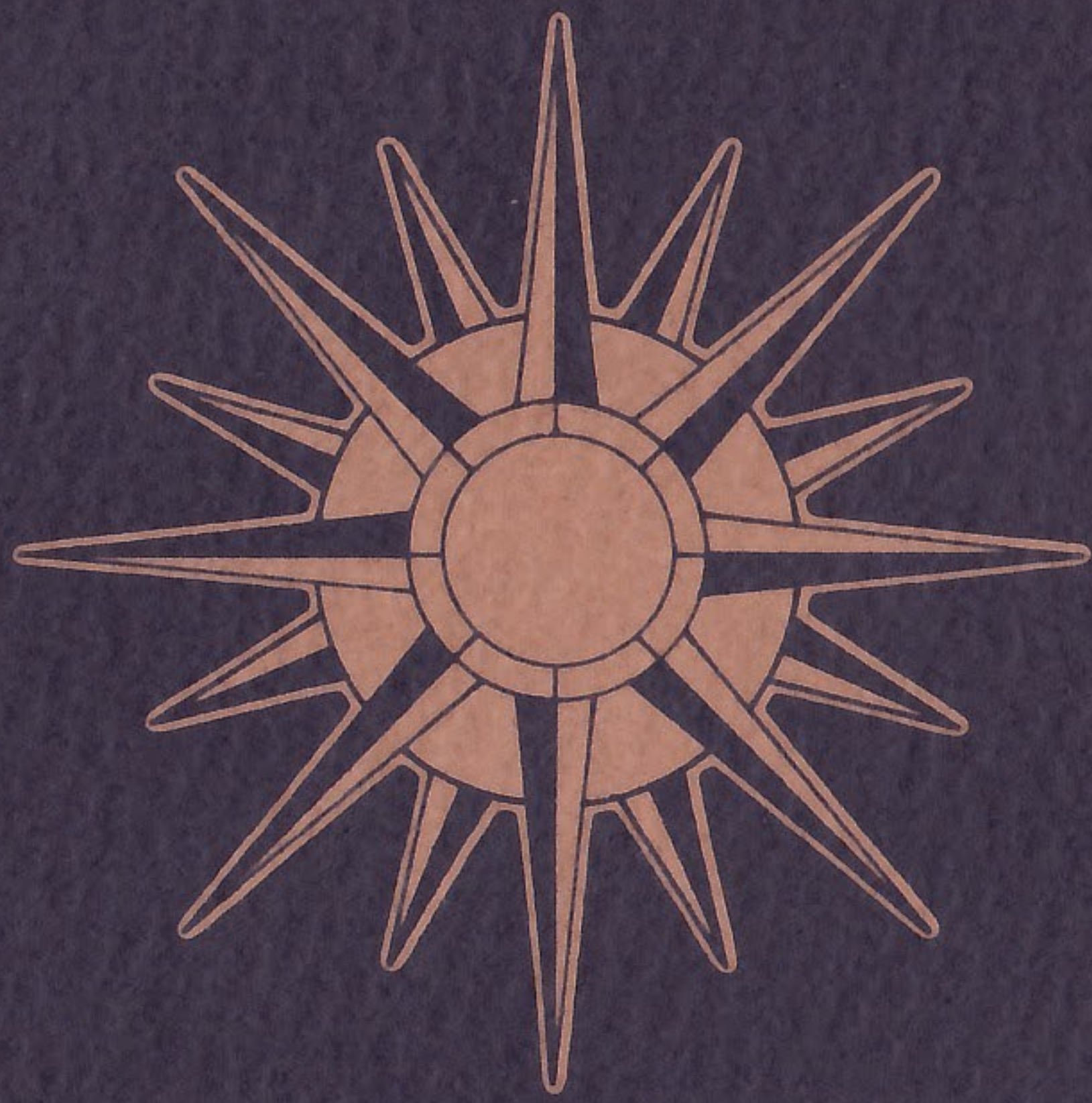
丸子博史 (P.10~P.15)

©1996 KOEI CO., LTD.

『大航海時代III』サブマニュアル

『博物図説』





株式会社 光荣®

©1996 KOEI CO., LTD MADE IN JAPAN